

関野吉晴著 『グレートジャーニー 人類5万キロの旅』

人類の先祖である猿人がアフリカの地で生まれたのが700万年前。以降、人類は原人、旧人、新人という段階を経て、故郷アフリカから全世界に拡散して行った。この気が遠くなるような700万年という歳月を掛け、当時としては気が遠くなるような5万キロという道程を歩いて、人類はアフリカの故地からシベリア、アラスカを経て南米大陸の地の果てパタゴニアまで辿り着いた。この人類の大移動をグレートジャーニーと呼ぶそうだ。

この人類大移動5万キロの跡を、逆に終点のパタゴニアからアフリカの人類発祥の地タンザニアまで、自分の足と手だけで都合10年間を掛けて歩き通した紀行が本書である。足は徒歩、自転車、カヌー、たまに犬ぞりや馬であった。ただ歩き通したというだけでなく、それぞれの地の辺境でその土地と一体になって暮らしている先住民族との触れ合いが本書を通底する貴重な記録になっている。

南米のマチゲンガ族、ヤノマミ族、北米のナバホ族、アラスカのエスキモー、シベリアのカリヤーク、モンゴルやドルポの人々、アフリカに入ってからマジャンギル族やマサイ族、その他名も無い辺境の村々の住民等々・・・

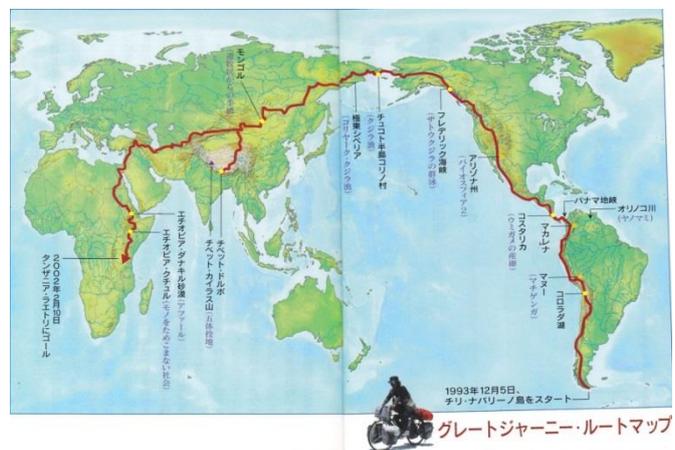
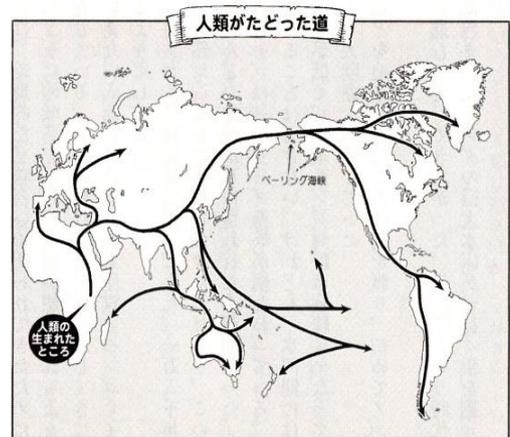
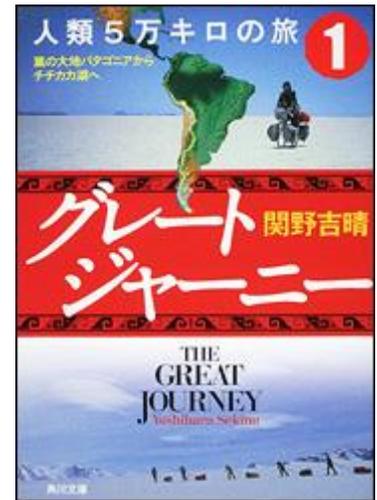
著者が辿った“グレートジャーニー”には、海峡あり、ジャングルあり、氷河あり、砂漠あり、ツンドラあり、氷原ありで、自転車やカヌーでの移動には大変な苦勞があったことに加えて、武装ゲリラや武器・麻薬密輸業者、盗賊、などが隠れている危険な無法地帯や国境も沢山あって、これらの通過に全神経を使って疲労困憊した様子も生々しく描かれている。

この旅行は、TV局や出版社などが支援し、またTV局の撮影班やその道の専門家が同行するなど、恵まれた探検行ではあったが、やはり、我々には想像もつかないような苦勞の連続であったと思われる。

著者は、一橋大学在学中に探検部を作り、以後20年間に亘ってアマゾンなど南米大陸の辺境を旅してきた。彼らが暮す村を訪れ、同じ物を喰い、一つ屋根の下に眠る。一つの村にできるだけ長く泊めて貰うのが、著者の旅のスタイルで、例えば同じ村に半年も居続けたこともあったそうだ。その結果、アマゾンのマチゲンガ族やアンデスのヤノマミ族の人々とは30年来の付き合いだそうだ。

その間、東京下町の被差別部落・外国人不法滞在地帯にある皮革工場で働いたり、そこで差別されながら働いている最下層の人々、部落解放同盟の人達、また、アイヌ、マタギ、などとも交流した経験がこの旅にも生きているのであろう。

また、辺境で生きている人々に一番不足しているのは医療行為であるという思いから、横浜市立大学の医学部に入り直して医師になり、この旅行の途次途次で病人を治療してきたというから、所謂探検家や探検小説家などとは一味も二味も違ったキャラクターであろう。



このグレートジャーニーを思い立った著者の動機は、「我々はどこから来てどこに行くのか、我々は何者か」という疑問から発したと書かれているが、本書の成り立ちについては私ごときが云々するよりも、著者の「あとがき」をお読みいただいた方が話が早い。あとがきに曰く、「この旅では、一枚の布を織る気持ちで歩き、駆け、漕いでいた。布を織るには縦糸と横糸が必要だ。縦糸は南米からアフリカまで、自分の腕力と脚力だけで一本の線で結ぶこと、そして横糸は寄り道だ。気に行った村とか、素敵な人、雄大な自然に出会ったら暫く立ち止まる。寄り道にはかなりの時間をかけた。寄り道には様々な気付きがあるからだ。縦糸には達成感がある。それでは、出来上がった布は何か。それは社会、世界を見る目の変化、それに揺さぶられて変わった自分自身だろう。(後略)。第5巻あとがき)」。

かって、著者の講演を聞く機会があった。“探検家”という人種にありがちな驕りは微塵も無く、物静かな学究という雰囲気であった(当時は某大学の文化人類学教授)。

角川文庫(全5巻)、平成22年刊

本書は5巻本の大冊であるが、先住民との交流だけを抜き出した『グレートジャーニー「先住民」の知恵』という本もあり、こちらには沢山のカラー写真も併載されていて眺めているだけでも楽しい。

光文社「知恵の森文庫」2003年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)

